



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	環境保全の公民協働に関するエスノグラフィック・アクションリサーチ：自治体行政および NPO の環境教育事業をつなぐ試み
Author(s)	元廣，修爾
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16976号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16976
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99820
Type	doctoral thesis
File Information	Shuji_Motohiro_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 元 廣 修 爾

主査 教 授 小 田 博 志
審査委員 副査 教 授 山 口 未 花 子
副査 教 授 宮 内 泰 介

学位論文題名

環境保全の公民協働に関するエスノグラフィック・アクションリサーチ
～自治体行政およびNPOの環境教育事業をつなぐ試み～

当該研究領域における本論文の研究成果

行政と民間とのほざまで様々な食い違いが生じ、それが社会問題にまで発展するケースが後を絶たない。例えば環境に関わる現場では行政側の方針と民間側の利害関心が衝突することが少なくない。本論文は環境保全の場で見られるこうした公民協働の不調に焦点を当て、その要因は何か、それをいかに調整できるのかを、人類学的な観点から明らかにした成果である。筆者の元廣氏は自治体職員として長年環境教育を担当し、また環境保全に取り組むNPOの活動にも参加してきた。その立場性を活かして、公民協調の不調の背景とその改善の道筋を探ろうとすることが本研究の出発点である。

ここで元廣氏が方法論として採用したのがエスノグラフィック・アクションリサーチである。エスノグラフィックとは文化人類学の領域で発展し用いられてきた調査研究の方法論であり、現場をその内側から描き出すことに特色がある。またアクションリサーチとは、何らかの活動とその現場の調査とを組み合わせ、調査の知見を適宜フィードバックさせながら活動の軌道修正をしていくという技法である。現場の内在的理解によって活動の柔軟な修正を試みるエスノグラフィック・アクションリサーチは元廣氏の目的に適合しており、本研究は日本におけるその先駆的な実践例である。理論的には、ブリュノ・ラトゥールのアクターネットワーク論、ティム・インゴルドのエージェンシー論、クロード・レヴィ＝ストロースの真正性の水準論を援用し、先行研究を周到に押さえた上で、人類学的に高度な議論を展開している。

これらの方法論的、理論的な立場から西中国山地・芸北及び三段峡におけるNPOの活動現場における人・モノの関係をたどった第6章～第10章は、エスノグラフィックとして非常に優れており、ロゼットの複数の時間性のような示唆に富む考察が随所に織り込まれて読み応えがある。また自治体職員として行政の現場を内側から自己省察的に分析した第11章は、自治体エスノグラフィックとして元廣氏でなければ書き得ない、きわめて独自性の高い内容となっている。ここで提起された、パノラマ的視座からの手続的統制という行政側の傾向性を、地域の実情と折り合いを付けながら対話的に実践に移すための実務技法が第12章では検討されている。そこで見出された「実務者のネットワーク」の活用といった知見、および第13章で提示された地域の人々を法制度の内で支援し、外で制限しないという条件は、結論での「風景を前にした語り合い」「モノの自治」「聞く営み」などの提言と相まって、今後の公民協働の現場での応用可能性に開かれている。

総じて、自身の立場性を活かして公民が接触する領域の内実を人類学的に解明し、かつ実態改善の筋道をも示した、学術的に高い水準にあり、さらに応用的な意義も認められる、優れた研究成果である。

学位授与に関する委員会の所見

以上のように本論文は、学術的な独創性と社会的な意義を兼ね備えており、社会人と大学院生という二つの立場がこの上ない形で相乗効果を発揮した好例として高く評価できる。これは今後

の本学院における社会人院生のロールモデルとなるであろう。また本論文は実社会の問題への文化人類学的な研究手法の応用例としてユニークであるばかりか、さらに環境社会学、環境保全、環境教育、自治体行政、公民協働などの諸分野でも今後参照されることが予想される。本論文の内容はすでに3本の査読付き論文として学術誌(『北海道民族学』ならびに『健康科学と人間形成』)に掲載されており、学会において一定の評価を得ている。

口頭試問の際には本論文の意義に高い評価が寄せられる一方で、ときおり見られる記述の冗長性、理論的な整合性の部分的な問題、NPO参加者としての立場性の説明の仕方などに関する質問が向けられた。元廣氏は、これらの質問に的確に回答し、自分の意図を説得的に説明すると共に、今後の改善点を自覚していることも伺えた。またこれらの質問はあくまで部分的なものであり、本論文全体の意義を損なうものでないことも確認された。

こうして審査委員会では一致して、学術的ならびに応用的に高い水準の研究成果である本論文が、博士(文学)の学位にふさわしいものであるとの結論にいたった。